

同窓会小史

同窓会は、大正三年(一九一四)第一回生が卒業すると同時に誕生したが、正式には同窓会の規約ができて、会員の承認を得た翌四年一月からであった。以後の活動を年譜にしてその足跡を振り返り、その一端を紹介する。

大正四年一月 母校創立五周年記念
大正四年 同窓会規約の制定(松井清三、清宮 保、松村季美氏らが原案を作成、同六年発行(第三号)報告書に掲載)

大正四年四月 同窓会(時)報の創刊 はじめ報告書の形態をとったが、大正一〇年七月(第七号)より「告書」の二字を除いた。初期年一回、一一年から二年一回発行

大正七年三月 同窓会事務所 はじめ養蚕部は養蚕事務室、製糸部は製糸事務室の一隅で行っていたが製糸教習宿舎を事務室に借用して行うようになった。

大正一四年一月 母校創立一〇周年記念
昭和二年三月 支部設置 同窓会設置以来各地に支部が結成されたが、未だ支部規定がなく、大正七年に支部会の規則が定められ、同一三、一四年の二回改正され、昭和二年三月には抜本的に改正が行われた。昭和三年五月時点の支部設置数二二支部

昭和二年一月 第一回代議員会 現在の千曲会総会の礎となる代議員会がもたれ、経過報告、協議事項の検討、役員選挙などが行われた。

昭和三年五月 同窓会機関雑誌の拡充 内容の充実してきた機関誌(会報)を二分し、一つは学術的な「蚕糸学雑誌」に、一方は本支会会員等相互の通信連絡機関として会報を発行。昭和五年四月より「千曲会時報」として毎月発行

昭和五年七月 母校創立二〇周年記念事業 同窓会会費の積立金より一万円を支出、ほかに特別寄付により事業を進められたが、金融恐慌など世情に鑑み事業を中止。海外留学資金、針塚校長還暦祝賀会等に充当

昭和六年一月 針塚校長還暦祝賀会 上田市公会堂大広間で関係者約二百五〇名が出席して盛会

昭和一〇年二月 第一回蚕学談話会 千曲会養蚕部主催で講演会と研究発表会の形式で開催。談話会はその後適時開催され、会員相互の研鑽の場とされた。

昭和一〇年一月 母校創立二五周年記念事業 祝賀会の協賛、針塚校長の肖像建設、蚕糸学雑誌の記念号の発刊、本会功労者の表彰ほか

昭和一五年一月 社団法人千曲会 同窓会の社団法人化は昭和四年の代議員で提案され、昭和七年七月に名称を「千曲会」と改称して、同一五年八月二三日に認可。この年の総会は母校創立三〇周年記念式も兼ねて開催

昭和二二年九月 千曲会報の再刊 千曲会の連絡機関「千曲会報」は戦局のいたすところ、昭和一九年一月二五日発行の第三六号で廃刊。終戦後、二二年九月一日付で第三七号として再刊

昭和二一〇二五年 母校大学昇格運動 昭和二一年学制の改正に伴って千曲会では多年の宿望であった大学昇格を達成し、繊維産業の発展に資すべく活動を始めた。京都・東京の三繊維専門学校と同窓会、上田市、長野県、関係業界と連携して運動を進めたが、C・I・Eの一果一大学の基本方針についてその実現がみられなかった。

昭和二二年六月 上田繊維研究会・東信千曲教育研究会 上田繊維研究会は千曲有志の発起により、研究と技術者養成に資する目的で発足。また、東信千曲教育研究会は、上田を中心に東信地区の同窓会員の研究と親睦を目的に昭和三一年に創立された。

昭和三五年一〇月 母校創立五〇周年記念事業 猪坂直一氏を委員長に次の諸事業が遂行された。財団法人上田繊維科学振興会の設立 三〇〇万円、千曲会施設拡充費 六〇万円、祝賀行事費 一〇〇万円、その他 九〇万円

昭和三七年一月 母校火災復興資金の募集 同一月二六日に母校本館が不慮の火災により焼失、母校は学部改新実現の第一歩を踏み出した矢先であり、同窓会でもその復興に総力を上げ、五四〇万円の募金額を達成した。

昭和三七年七月 財団法人上田繊維科学振興会の設立 「研究の奨励及び助成を行うと共に、学術を通じて広く社会と大学との接触を斡旋し、文化の向上と繊維産業に寄与する」ことを目的に設立。寄付金三〇〇万円を基本金として昭和三六年に任意団体として発足。昭和三八年七月一五日に財団法人として認可。

昭和三九年一月 一般教養過程の統合に対する運動 信州大学の一般教養過程を松本地区一ヶ所に統合する計画に対し、同窓会では「母校に不利を招く」とし、同年の総会で反対を決議、大学に善処を要

望。しかし、その後大学全体並びに学部自体の発展のため再検討、統合に参加

昭和四五年八月 蚕糸学統合見送り 昭和四〇年大学機構改革の一端として蚕糸学を一ヶ所で行うとする統合問題が起り、同窓会、上田市など地元の強い反対があり、結局文部大臣の決断で関係大学で行うことになった。

昭和五五年一月 母校創立七〇周年記念事業 昭和五一年度の総会で、母校周辺に適地を求め、同窓会館を建設し、同窓会と母校の発展を期すべく決議。笠原正己氏を委員長に準備が進められた。これに対し募金申込額は一億二〇〇〇万円に達した。昭和五四年九月一八日に地鎮祭を挙行、同五五年一月二三日に落成式が行われた。

平成二年一〇月 母校創立八〇周年記念事業 二二世紀へ向け学部改革も完了し、学部と同窓会の協賛で繊維連合研究発表会、記念講演会、祝賀会並びに写真集「繊維教育八〇年」の発行に向けて着々と準備が進められる。

付記 同窓会から出版された書籍 蚕糸学講演集(輯一)三、大一五、昭四、同七、蚕糸学研究策集(大一一)、蚕糸学雑誌(巻一)一四、昭三、一八、絹糸の構造(昭三三)、創立五〇周年沿革(昭三五)、針塚長太郎先生・その伝記と追想記(昭三七)、石倉新十郎先生・自伝と回想(昭三八)、創立七〇周年記念誌(昭五五)、わが国の製糸技術書・加藤宗一文庫の改題について(昭五七)、クワの文化誌(昭六一)、写真集「繊維教育八〇年」(平二二)

・千曲会報の編集を担った歴代の人々 昭五・加美好男、五七・森山二郎、七九・須田圭二、九一・四・香山清和、一四一・一七・小松忠一郎、一七一・一九・荻原清治、一時休刊、二二二・二五・町田博、二六二・三三・田口亮平、三二二・三五・小山長雄、三六二・四三・小林高平、四四一・五〇・竹田寛、五〇年六月から発行人は理事長の母袋忠右衛門となり、実際の編集は次の各氏が当たった。小山長雄、青沼茂、三石賢、林貞男、清水漢、矢彦沢清九、中沢賢、柳沢幸男、石川博、矢彦沢清九の順で第二三六号を発行して現在に至っている(敬称略)

思い出の歌

学友會歌

- 一、大いなるかな浅間山
轟々と乾坤どよむ
聞け神祕の雄呼びを
蓋世の士氣身に泌む
矜れ健児
高き啓示くこゝにあり
- 二、麗しきかな菅平
揺々と若葉しげる
見よ清和の高原を
青春の愛野に光る
矜れ健児
深き喜悅くこゝにあり
- 三、聖らけきかな千曲川
涼々と千古のひびき
あゝつきせぬ努力の譜
精励の志操胸にわく
矜れ健児
尊き教訓くこゝにあり

養蚕学科応援歌北極星

- 一、北極星の影冴えて
浅間の嶺に吹く風
千曲の水に身を鍛え
赤き血潮の若人が
仰ぐ眼の射る所
月の桂の樹は青し
- 二、蒼天高く地は広く
時信州の秋深し
熱と力の若人が
立てば玉散る血の火花
煙塵天を掩ふとき
敵敗兵の影何処
- 三、戦禍の巷雲晴れて
明星天にまたゝけば
月桂冠に映えるとき
戦勝の旗空高く
凱歌の声も高らかに
養蚕健児意氣高し

紡織学科応援歌凱歌

- 一、紫紺の連山日に映えて
秋清冷の常陸に
栄冠重ねし紫旗の下
あゝ出陣のあさばらけ
- 二、胸の血潮の若ければ
今日紅の火と燃えて
斗はんかな弦の絶へ
千古の太刀の折らんまで
- 三、秋搖落の風立てば
傾陽舞に輝きて
遙に仰ぐ明星に
凱歌の酒をくまんかな

校歌

- 一、御国の爲にますらをが
富の基を開かんと
蚕糸の道を究めつゝ
つくす誠のあとみや
- 二、夜を日につぐる労働に
神の恵ぞやどるなる
身に泌む汗は世をすくふ
深き情の涙にて
- 三、都の花は見ずもあれ
吾等は徳を一にして
千曲の川に光る月の
清きその名をうたわれん
- 四、御国の爲にますらをが
富の基を開かんと
蚕糸の道を究めつゝ
尽す誠のあとみや

学友會応援歌

- 一、凝りては百練の鉄
肉は鳴る腕の力
あゝ進め強敵何ぞ
いざゆけ吾等
常田の健男児
- 二、奮ひては浅間の響
熱血湧く青春の意氣
あゝ進め必勝期して
いざ行け吾等
常田の健男児

製糸学科応援歌

- 一、雲流れゆく東に
静閑を破るくだかけや
大旆の影 陣鼓の音
捷破の時はめぐり来ぬ
さはれ門出の杯に
若きこの胸迫る哉
- 二、消えゆく星の想ひ出に
そぞろゆく日のありくと
苦練のひびき誓ひ言
春秋淡く時ぞ今
さはれ別れの送り火に
紅の血ぞうづく哉
- 三、烈日の下血はもえて
仰げば高し趣味の峯
頭正の楯破邪の劍
吾が紅の顔は
出陣の調べに戦勝の
希望に満ちてもゆる哉

織維化学科応援歌

- 一、常田ヶ丘に聳え立つ
朝日に映ゆるいらかこそ
吾等健児が膽を鍊り
腕を磨く学舎なれ
- 二、蒼々清き千曲川
水は不撓の意を示し
辺りに青き若き木は
吾等を讀ふ色深し
山と川との精をとり
- 三、山と川との精をとり
化学の道に勤しめば
理想は遠く意氣高く
心の胸は勇むなり
- 四、若き草木の生い立てる
こゝ秀麗の地を占めて
朝な夕な弛みなく
栄えある歴史築かなん

修己寮々歌

友に告ぐ

玲瓏として高き音妻の霊峯

千秋の白雪燦として蒼穹に映え

溶々としてつきぬ千曲の清流

敵かに千古の神祕を語る

あゝ秀麗の気凝りて美しきかな常田ヶ丘

この悠久の天地つきぬ生命の流れ

それ団結の精神益るゝは偉なる理想

堂々と歩武を進めぬ

聖らけき自然の啓示

崇め享け嶽へ研ぎて

常陵に古きを誇る我が修己寮史

新しく進み行く若人の行手を示す

熱血の歌いざや歌はん

一、あゝ黎明の空の色

牧場の草はしづくして

朝霧に浮ぶ浅間山

煙の高くたなびけば

このみすゞかる信濃路に

我撞れてたどり來ぬ

二、春は常田が花の下

唄いてゆけば胸熱く

朧の月に花の香の

よせ來る風を面に受け

思は深きこの四年

尽きせぬ夢を追い行かん

啓明寮々歌

嗚呼歌え新墾の地を

一、憧れの丘を越えて

君と行く常田の朝

風よ吹け乱れる髪に

二、水清き千曲のせゝらぎ

河原の千草に伏して

夢よ行け流れの果てに

さ霧濃き浅間の麓

三、啓明の窓を慕ひて

星は指す四年の誓い

君語れ臆の幸を

四、曙の緑うそぶき

学舎に空は晴れて

あゝ歌え新墾の地を

いざ競え青春の花

叡知みなぎる

(昭和二十五年入選学生歌)

作詞 宮坂敏夫

作曲 羽毛田憲一

一、叡知みなぎる 自由の園を

はぐくみ行かむ 若人の

真理の笑みは きよらかに

白雪の嶺ぞ 仰ぎ立つ

信州大学 より新しく より強く

二、学統栄えある みすゞの郷に

むつみ学ばむ 青春の

愛の絆は すこやかに

駒草の香を 薫いつつ

信州大学 より美しく より固く

三、叫び小さく 世にとどかねど

かかげて生きむ 友だちの

理想のひかり さわやかに

緑ゆたかに 薫るなり

信州大学 より逞しく より高く

青空の心すみ

(昭和三十六年度入選学生歌)

作詞 清水 允熙

作曲 木田富士雄

一、青空の心すみ 白き雲流れる

駒草の花をめでて

自然と語れば

理想の光胸にみちて

二、星の詩地にふり 夜の調ひろがる

思惟の時を得て

うかがう真理

深き窓に光は残り

三、自由の鐘ひびき 青春ここにつどう

正しき心もちて

学舎を築く

誇らかに歴史を讀えん

いまだ道を知る我等

学びの庭の

(昭和四十三年入選学生歌)

作詞 藤井 宅

作曲 橋爪潔志

一、学びの庭の 凍てとけて

麗に匂う桜花

朝日に映ゆる アルプスに

残れる雪の まぶしさよ

二、赤きリンゴを 手に取りて

共に語りし行末よ

濃き紅の 血の浪り

大志は燃ゆる 顔に

三、学びの里は 麗しく

雪の衣を 重ね來し

歴史の里よ 古き郷

あゝ信州よ うまし郷